

「これも経済学だ！」

中島隆信(著)

ちくま新書 筑摩書房 2006年8月10日刊

ひところ流行った経済学の入門書は用語の定義や既存の経済理論を単純化して解説したものが多かったように思う。確かに、これらの本は、その種の知識を問う試験には役立つかもしれないが、現実の経済問題を考えるためには全く役に立たないものであった。

近年、これらの入門書とは趣を異にし、現実の経済事象を取り上げながら、それが経済学でどこまで説明できるかという観点から書かれた好著が出版されはじめている。今回紹介するのは、これまで、『大相撲の経済学』、『お寺の経済学』、『障害者の経済学』(いずれも東洋経済新報社)を矢継ぎ早に出版してきた、いわば真打ちともいえる中島隆信氏がその研究成果をとりまとめた一冊である。

本書には数式や統計は出てこない。むしろ本書で語られている問題は数式で表現できるものより遙かに複雑である。例えば、障害者に一定の負担を求める障害者自立支援法は弱者切り捨てでけしからんという議論に対して、いや障害者も負担をした方が、サービスの質の向上などを気兼ねなく要求できるのだという議論がされている。この議論は行政一般に適応できる。政府が必要かどうかもわからない施設を建設し、無料でサービスを提供するという一方的な関係から、国民に一定の負担を求める双方向の関係に移行することで、そこに緊張関係が発生し、それがサービスや財の質の向上をもたらすという発想である。

本書を読むだけでは経済学の全てがわかるわけではないが、経済学とは要するに経済行動の基礎にあるインセンティブを明らかにし、それを上手に利用しながら有限な資源を有効に配分する手だてを考える学問だということがよくわかる。学生、社会人を問わず、経済学の本質を知りたい方にはぜひ一読をお勧めする。